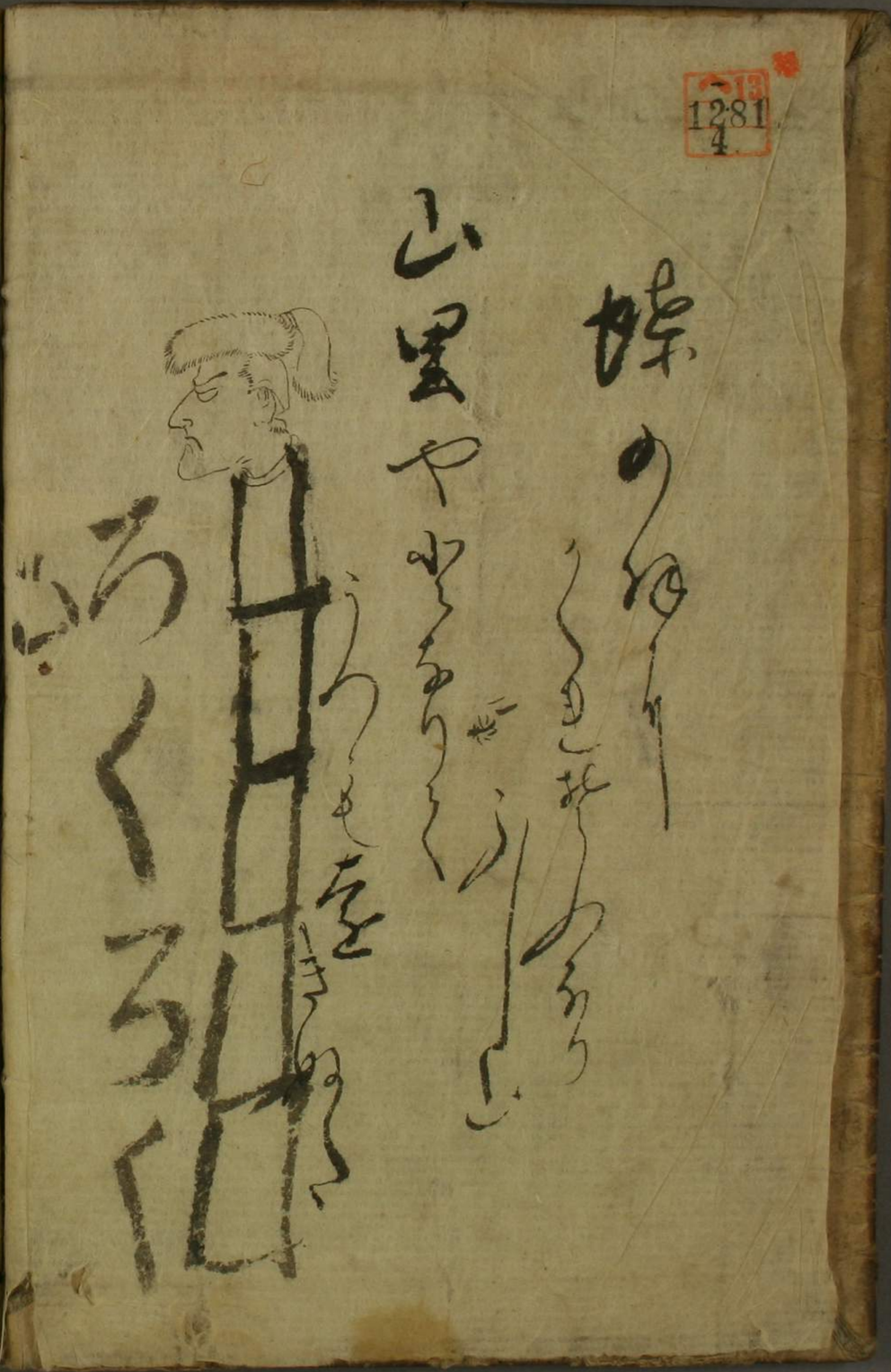
Centimetres
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

1281
4



村田文庫

千代曩媛七変化物語巻之三

振鷺亭主人　著

第七

東都

荒妙孤念著衣袗
出色妖術託地鮨

偖も木の葉化里みくハ此日纈帯乃賀のれいと真平山河の瀧津みそ一献の鯉魚と求ア て鱠ホ作ア 著蒻草蘚ハ堀く菜と地炉の傍ヨ煎焼を木葉ハ又岩倉寺の権現ゑ當國の一乃宮本居みくゆ海ゆび兼てより丹精を凝し三寸燈明ハ持ち椎の茅折敷くる上ホ栗の飯盛て是を饌只管安産を祈ケ左京ぶ到る ハ待ゆくり待りし處ヨ左京件の贈物を饌くゆ〜よりも由々しゆ小入ホ何ろさくもさ先ハ粥ヨ誘りて喜をゞ〜二人が中を打明し荒妙ホ誘し ホ後嗣を儲る支こよろさ亭みく産褥の引出物如此什々を贈ら ハ祝ヒ也とて

件の賂物は木葉が前に併て荒妙が慇に供へる詞と共に一々に中聞せ切なる詞の
にあらぞ親子志の篤ともしらし木葉あさからぞ嬉しく再拝して付物
を祝るに産衣一重襁褓一重紅の勒肚巾に丁ある堅魚そへて産衣と寿き
法華寺の犬張子の裡には安産の符産屋にくゆらせる白粉畳紙冒襁褓
らぬぐ心とつけし恵みで妊身は間隙る風をもいとへとや綿ふくよかなる被窩に
褥子ともそへ色も不の如く紅梅裏の花田色の小袖は忠ぞけ夢の懸ましまく君れ
せざりしを賜ひよ木葉が祝みは和歌よる賛なる寔に北の方は賢女なるせみは
篠志の難遭さよとて付そと再三戴てぞ収る左京別に一重の盒をとり出しちまちは
荒妙が手製の餡あるが産前きまへる食味快るぞ酸味を好めのあれげとて添り
とーぬとのよ木葉は一再賞感をかくてらの小袖を畳みし出居の内に持出きて積
の抽匣乃裡に收しるが左京是を視るくうの小袖は切に荒妙が給たるものなれ也

んは本意もは今日の賀に衣装束着玉へと勧るにぞ木葉も何気と見ひ再出居の内
に入て件の衣袷を出さんやと何の心なく櫃の鐶鈕を曳て抽匣を開るに怪しや
畳しらの衣袷乃袖の裏よりきも色青ざめし糸乃ちゅうある繊牛をまくと揣出して
木葉が面を睨へと掃くなりしがいつかと倒に破と抽匣は揣るが編身悚然して
毛骨竦だし身に竪なり　これも悟と見るべ執念此衣袷に著しものかと思へいよく
怪き骨に切て心に徹るそろ怖りつさどかくる事を左京に告んも兄しと心に納て
面の色をかをし出居を出て後に汚さんも憚りあらべきこの瞬着にもと枝もぬき
ぬるとて何気もなき躰なくぞいくり左京さるべ妊の帯を締玉へとぞ勧む木葉
は何とあるん心進ねどいかもいらふと荒妙が締てし勒肚巾とよき程に締ける
が忽に腰痛く皹そと膚を巻縮て気骨に砭さるがごとくあり小しは怺しかど
息も絶るえなりに苦くて出居の内に入勒肚巾を解るしが忽ち苦痛を去りける

たゝくの女房衣を考く求まゆ〜く
おもハさ折るをの〜もろ〜めるる女ハれら衣ハ
のと考るふ衣れ袖のうちよりいとゝそきるを
き〜出せりそハさきのぬ〜乃女ぶ乃うねぎふるそあ〜
らに荒妙ぶ執着の畑うゑを画く女人の
祓ふ人の〜ふ

さてゝ此勒肚巾のあゆ〜と祝るふいぶまふ納あり乇針数十本ばら〜と落
しぶゑるふ蚯蚓乃蠢ぶ妙く蠕ゝと動く乇色乇公の迷ひ欲付とてもあゆし
さよ祝るもゆ〜く忌〜ゆと件の針のとろ〜く勒肚巾ふ推くるゝそ潛ふ出居の内
より向ひるる谷川ふ到り勒肚巾を流〜ゆをゝ水面ふ閃蚊る其形勢宛も生身
の蛇ぶ河ゆを泳ぶ〜ゆ〜〜織ゝと向の岸ふ着て岩の礎ふ巻れてぞ乇ゝ〜ぞありね
木葉ふ後ともゆ乇て田屋の内ふ入るゝとび左京ハ氣色よりふ居〜ゝとび木蔭も
何ふ手もゆ〜さ体ふ待ゆり時ふ真平合子掘置粧〜く持出つ獺祭の所賀ゝ寸ゆ〜
倡や閑食ぶ〜山里ゆきゝるゆ〜きりの邂逅ふゝと摘て飯匙ふ〜〜
び左京笑坪ふ入ゝあゝと学ぶ学ぶゆ〜〜ば書侍官女扶ゝる〜ぶきふ書も
あるべゝふ山里の公ゆをきふ上膝ふ〜〜ぶ〜ふ扶とり志び〜俗食ゝ〜
真の食麁ゝと偖ゝ丁ゝる蕨の羹ふひ打栗の所付ふ蒸菜とまゝる

ぞもゝ〳〵くとさゞめきいの真平まゝ三寸瓶子土器ゝくて持出〳〵ば
左京頻ゝ與ゝ杯〳〵殺盃を傾〳〵不覚熟酔〳〵て竟ゝ枕ゝ
臥くるゝぞ春の日もたゞ闌ゝ逮ぬ真平さゝぶ産宮ゝ君の代ゝ参仕ゝて
とて出行くる比〳〵も春の夕ぐる〳〵返照の鐘の声いとんゞそく木葉独
方燈ゝともし火を點ゞ左京ぐいゝ〳〵酔臥るゝと沢くまゞ如月の昨今
北山里の冱ゝ肌寒ゝも坐らんゝ酒の競ゝくゝの侍ゝも臥ゝ
うかいざゞ出居ゝ褪布て進せんいざゝ我君といざゝく更ゝ荅ゝ
嵩ゝぐゝくゝのまく枕ゝ矣へく夜のゝの方彼んとゝの荒妙ゝ焙つる疊
夜具を把て扯起るとゝとゝく肩ゝ一杯の冷水を灌ぶゞく毛骨いよ
ぞゝ嚇得とゝて犯るゝゝいゝゝ六尺ゝゝの蛇ひくゝと領首ゝ引擡
被窩の右と左の狭ゝ裏ゝ尾と首ゝ差出〳〵長き舌ゝ吐尾ゝ閃〳〵て

たゝくとうごめくゝゝ叫と竟ぎゝくゝ怖ゝ起てゝとゝいえる言も戦慄
只立ゝくゝて喚ゝ〳〵ゝ左京此色ゝ殘て目覚ゝ蛇ゝ何地行ゝんゝ知ゝ
木葉ゝ倒伏ゝく息も絶〳〵ゝる落侍ゝ急ぎ醒藥ゝ灌て呼いけゝゝ漸
甦〳〵ゝど顔の色も変ゝ曾刻て更ゝ詞も出ざりしゝ良須刻〳〵く人ゝ地
定ゝ〳〵ゝべ左京何変ゝく有ゝくゝぞと推て其故を問ゝ是ゝ木葉ゝ今ゝ
何〳〵ゝゝさゝゝゝ仔の恠異ゝ事ゝゝありのゝゝゝ語ゝくゝゝ左京ゝを
閉て暫然ゝとゝて驚きその理奈何とも喻ゞくゝも木葉ゝ一向ゝ合ゝく
喚〳〵ゝと娛ざり〳〵ゝゝ顧ゝ此里僻地ゝ〳〵く陰氣ゝゝゝ
荒屋の習蛇梁ゝ住ゝるゝも有ゝんゝ〳〵何ゝ怪ゝ是ゝん吾ゝ一人ゝ
ハさのゝ〳〵ゝゝ是〳〵ゝゝ是ゝゝゝゝゝ愁ゝ排ゝゝ酒ゝゝくゝゝゝ
盪めゝくいま一層の勢ゝ増ゝ〳〵ゝゝゝくゝゝゝ木葉ゝゝゝ吟〳〵ゝゝゝは

きもらそと諸共に酒を勧て興じ居る左京所殺の人荒姉が縋りける鮨
らをよろ〳〵やとりつるに木兼を打と中〳〵思ひ〳〵弘ぐる鮨の盒とり
出し〳〵進せんとて盒の蓋引とれば鱈き烟燈と立く此鮨盒の種よる
もにくそと踊出し〳〵鱗さらぐち鰭鬗て悉皆活る魚のごくあるに誠に怪し
う名有さるうさまび今越中の國乃名産とも松波鮨といくるものあり色
蛇に似る魚ありて色を製を号俗に蛇の鮨といくるものの色ありとや此時
左京木兼に色とき怪と咲たて〳〵祝る所に忽ち緑の下よりも簀子を蹴
て双の鋒晃くと閃出り左京木兼をつと踊て退て左に如何と看そ
何の床を拘起し六尺有余の大の男獲巾真深に面を曩氷うを白刃を引
挈洋そとあ〳〵られ出ぬ左京に木兼を後に かくしに乙首を抽きあ〳〵
倚ぶ突んと身ぶるくうその刀を曲者搜てたらつく一拳當と擅

左京肋を突と呼と魂ぎる色力ありとも呼吸とありく顛き倒る曲者に
木兼を一脚に蹴く仆し髻を飜き青絲一搭あるうるりと捲詩あるかか
やと叫ぶもりうそあると谷の柴搗渡るる腳音响に曲者に直に柴の戸外
面に出しぶ傍の荻垣に影を匿して躲かくるる人に是玉谷真平なるが門
口を固より内に乃体を祝く大ひに驚まる驚し左京が寸口を撞に是落
まに秋に一口の氣を噴〳〵眼を閉く曲者やうじと起立とて仁の者の所為
なるやとい色ちくいづくよりろ詰うる名半裏剣えろしと怒なると
真平なるうと彷と携に掩に掩に掩ぶ〳〵る方燈の明にきく〳〵変とありぬ真平
に曲者得うそ脱さじと裾をせ折く眼を配きどあやもこうぬ
て件の曲者に後を眛し行地ともるく滅去る
○却説那曲者に何者の者ぞるとべ是即出色真平の二上山に荒

妖ふ憑き木葉が青絲一條を剪て左京が禁足の厭當しふし
件のごく採の一下ふ潛かく妖術を行ひ鮎を歸そうとさまぐの
怪異を現ぜる事是偏ふ荒妖が呪咀の祟と生邑が葬都那乃
魔法ふ憑るところなりき。

第八

木葉青絲厭當左京
荒妖暴惡責殲木葉

さるほどふ荒妖ハ木葉が青絲と得くその夜ひそかふ中門の下ふふかく埋
て禁足の厭當をなせるハいうる法ふやあらん左京さかくとも知らずして
木葉の里より拂曉ふ鍬を中門を入るとて生骨悚然ことさると学んあと
べそごろふ怖氣堅りのふ蹶き撲地と仆しゝび家人皆急ぎ扶起さふ立骸
癱てさゝふ起ざるとやうやく撥ぶきて奥ふ伴ひ労るふきせゝ傍とて

もうさふ行歩一すもかうふざるこそ不測ふ此時より行とうく腰酸脚癱て
家の内ごふあゆくもかねまび期や木葉里の通路きろしうくぐと
うて音絶とも亟せそ消息ちゝふも荒妖ふ怪ろく吉苦の然より尚
疑ろしふ木葉が事のゝ考ふうく想まく左京いよく胸鬱ゆにそろ
此ほくふや精神茫洋と行ぬ方ふの所失へるぶごくうりふうさる花ふ日月推
苒とゝて流邁とたゆゝ花ちり時鳥とうつり木葉が歳月の秋ふもうり
遠ふ真平奔来ア急と告くヤるハさてもも産夫人曉より腹ゝ
まをふが今ほどハ去きりふ生氣ごちくえや期ゝうりねと考ぬそうく準せ
ゝくと開ふふ左京を一歩も運びぐとくゝ出ぬじと案と墨ゝ荒妖ハ
ゆとうれそとて真平ふ對ひ和爲ちゝとうり冨山の催生藥をのとゝ
ゝふ真平忙ゝく冨山をさゝて奔行ぬ荒妖を裾蹇甲斐そゝゝて諸母の刀自と

侍女の女房を吾伴倶くはさがらんべ鬼子なりける子の捨をとめ給せしとおもひとめて吾左右待せ給へ也とて忽て木葉里に出て生く心の裡いと怖しかりける事なれば説此時木の葉里の庵なる木葉より初産の女がその母なり左京迅来る真平速飯まいとくろしき腹を抱て胸つくも人あるごとく揆詢て其胎内の若君よだしかく関せ給へ果報拙してかひなき母が腹に胤ませ給ひかくる宮士の穢屋の内に菅薦の上を産家とぞ舁き参する様浅ましあはれその昔なれば御祈の貴僧高僧又は医師侍乳母なんどさはやきて一門他家の使者ゆききして門前の車馬群をなしてぶつきに桑の弓引人もなく蓬の矢射る所もなきあかりに透間の風冷じかれども防し陰もなきはかなくもまべ今にも生産あらせ給ふとて什目の産衣一つざなきさ悲しさ痛しき体のくぞよ是ぞ指季中ね後拳臣の侍曹子が御産の有様なや苦しき打おもしの形れ果なとく悲歎のもかひ胷に浦て苦しき

息も絶々にも乱髪を悩し産の気次第に近よりぬれば情なくもあさましくえがたし今しも産ばいかにせん我君よ真平よ人をなきさらと喚ぬれどもあずかつてなくもよぶと鳥早小麻の山に啼声のみなく誰音信ものとてはなかりけるぞぶあはれなる風情なり此時木葉を頬に懐中して堪がたくかくる時たのむを神仏の威力なりとて心を力にあるを世なく起て浄手を遥に偈御の首を低て伏拝みまする帰命頂礼立山大権現日頃の丹精むなしからず擁護の御手を垂給ひ事故なく胎内の児生せさせ給へ此形をまぐに死かもせわ児の一命に換て祈奉るなりあらたに應援ありて吾児がね末護せ給へかしでも久堅の尺の桂も折がたり家の名をもあげさせ給へ吾児を安穏に生ませさせてび給へ我命を露さらもしらばとなりくし一心不乱に祈なる念ずとて以ちより二隻の蝘蜓小しく消失るが云くえぐるうるるぞ不測なる木葉に三

あくぶ
荒妙大悪無
道のふるまい
まして
木葉を責殲
あらく神通
川を推
かぐも

を祝ぐ事あるべきやさて人蛭子を蛭蟹八此狐妹脊乃
誓とする処なり吾尼さく安振まうぶ今死をとも此狐遺感なり
夫人備達こそ元男波芦辺の田露の雛をたぐる風情あるべき夫中ふを
愍の瞬と垂こそ乳人なんど被牙まぐも不叶とも責て殺育あるべき
狐のかどふ安振ふ守まうせまくと云つも三津九津あるる時ふ外面ふ人ありて
爭う你笛と安振ふおくべきやと喚る者あり木葉撃て首を撻て見ればこれ
が入なる者を是別人ふあるぞ荒妙柴の戸を推もうき後ふ力自ふ女を
ぐ従容ふ両袖をつまそ恭そ走く上坐ふ推ぐをりて進く学手と坐
木葉ふと你ぐ事ふ学ふ入る人法め箕箒の狐として正妻ふる我ふ對ひ失礼ふる
妾め坐こそて高しそそ立ふ励き色の下ふりも力自ふ女ふ学ふ木
葉ぐ左右の肘を捉ふ霞ふ引伏ふ々ぐ木葉ふ乙もとくふあるべこそ恐畏

ふるも云ふ法めふ入ふ生ふ唇さふ宣ふ天離夷の荒野の妙女ふれば木ふ端
とも思ふ不礼ふ免させぐまうくと只管河を畢てぞ記ふ荒妙ふを掩
て打斂咲又右ふ声とあくげ冷ふ笑ふ你妙女ふ古長ふも惕
うふりと故女瞞ふくあるぐふ我ふそ妙女ふりと乙の中ふ中ふ乙ふ
奇怪ふりと礙と盱て臓裏る鎧通の九寸五分玉ちるを抽ふ色ふ
と寄ふ木葉ぐ右の肘と含て裏めげさてそ蝘蜒の癒まふくとあるねあふ
やとふあふ剱逆手ふ持ふぐふと鑁ふくふ木葉ふ肘あけふそふ岡
ふるふ乙だふりふり荒妙ふあふりふ手ふふるぐ人を整てふぐ栗の
の中ふ剱を研ふて三とせぐ不ぐ乙ふふふ嗜ふふふの狐を打ふふ
我を普通の女ふふふ外面ふ賢女を見せふも内乙ふ大蛇ふふふ
耳の垢を穿てきけ何ふを乙ふ你乙を知ふ間避てふものを二上山の蛇ふ

丑の晌参〳〵ある八数夏の蛇を捕く居間の櫃の裡ゑ飼ひおき旅宿の怨念も
さきなく数の蛇ゑ針を植立くつもくるしくべたゆゑ、木綿ゑ覆ひ張せ
さくべ放ちゆうんと云ふくむその時数百の蛇呵責ゑ迫るその怨念うらく
と係ゑ牙ゑ執着でやあるなさ[illegible]ゑ憎〳〵妬〳〵あかふ瞋恚曾ゑ焦を一念
るどう係ゑ乙竜ゑ徹さうんや森ても紀くも切るこ[illegible]嵐のぬけよ蓋うう
ともゑりく係ゑ嚙殺さんとゆひ〳〵ぞよ前項纐節のゆ生物行の由縁あり
てうう〳〵めゆ乙とゆるさと計ゆくさく搖遣棄るうとゆくへあるりゑ恪しく
してうう猛ひゆもき花いろのかさ弦のきぬのたくとゞ紅梅裏のうら光〳〵く
夜の被の尚想ゆる夫るる蛇を縫くるゆ針と刺うる勒肚巾ゑ腹をも割子をも
殺ろと思ひの余り蛇の鮨をこく煩う毒害せん〳〵計うう係ゑ知らそとゆ
ちゆゑ我ゑ間者をりく聞ゑ密語悉くよく知るりさて乃子る月ゆかさゆれば

夫と禁足の魘〳〵て五个月ゑ程係ゑりくせの想をきせ乙と慰させける乙ゆよ
さよ喜〳〵さよさても間を沼ざりし五谷とゞい〳〵くも訴て富山の迂路ゑゆ
つ乙ゑ後ろくとして乙乙収生嫗とうろくゆゆくくと難産ときそべ〳〵難産怕〳〵と
ゆゆ〳〵す分ゑ切割ろ膝ゑ鬼ろ夫ゑ酒の殻とせ光胎ゑ児ハ生肉を醤として
ろひ和ろせろ乙べ〳〵光焙せよとゞ乙面ゑ夜叉のどくゑ変てさも威猛るゑそ
ろくくろりろ木葉ゑ悽〳〵ともゆ怖〳〵ともゆ悲〳〵ともいうん河もさ〳〵ふゆく肝
魑と刃ゑそんで淦ざる示脱〳〵と乙ゑ兎て乙乙非もうやさゆゞ悪ませろゆいゆゞ
吾倣ゑ命ハゆ〳〵生祇ゞ胎ろる児ゑそろくゑゞ見ざ乙親の忘形見ゆゆ
乙のきゑの母ゑ面一目ハ我児ゑ逢せくうゞすゑ分ゑも斬ゑ法情ゑ哀悲ゑ
いゑも肯行ゑ滴て紅涙ゑろくと懸る悲ゑ荒妙ハろくゑ小腸ゑ蹴くし
ゞ木葉あとろくゞ倒〳〵ゞ上昇血暈〳〵て牛頭没〳〵馬頭回く児ゑ胎内

より分娩し産色を牽しぞ哀なり今きへかくる森の果もおのひとり佇
石竹の花咲へらみど母と子の別や嬰ゑ三さんたさりお阿呼々々と啼々まば
木葉を嬉しき可愛さ悲しさ目も眩肝きつも男子の若ふくおんさるや
女子の児ふくもんまるせ名ゝく一目と抱あぐる荒妙水子を捜ゝ子ふく
顱ニツニツ打てゆくさげお抱ゆ後産とて大事の産處へ居ようとゝ祝ゑ
力自とお女ゝのまく木葉ぶ衣剥とりて赤條々とうゝ遣戸ちづゝくその
上ゑ真仰ゑ推倒し左右の手足弧拉ぎ力を極く押くうり今殺さゝ刃
のうくも木葉を我児とさゝけくよ人々よゝと呼ど喚と人音も松ふく嵐ぞうを
して恰も獄率の呵責叫喚の罪人も角やとぞりこゝうる既ふ荒妙立すぞりの
打ゑ鐵の鎚ともつとり木葉ぶ腹の上ふ跨て你等腸と硬し礎と壓て掙ち事
ゆうもとつて左右の手首ふ打を衝立鎚をかく丁ゝまつと打こめば木葉

息も切ゆげふく泣號ぶその色非想非々想天ゆも閉やもゝんと哀ふも人情し
荒妙此体とゝく北叟笑やゑ苦むゆ儘人を戯ゆくこそやゑ打打脈処を除
て徐々と活く殺くさるぞゆもしろや為左杜右く責ん木葉らくよくとて
又左右の踵ふ打と衝立鎚を拍子ゑ打く蹠ぶく衝通ぜば天ゑ號び手を動
地ふ震び足弧頻慟哭嘔唖とせしも大や魂の緒も糸より不そくうゝ
[illegible]無慙の最期こそ大悪不道古今亦曾有のふるまひゆうゝ荒妙尚飽
ぬどや木葉ぶ髮髮を低面をあゝゝとしせを打ちゆさも姑し来ゑ眉を顰く
此女厳とゝ閉しゝとゆ目どもぐも眉目良の姸ゝえゆもゆざりゑ智炊區あれ面ニ
くやといくさる面ふ唾吐うけしゝ最ゝき抱会うゆ刀自と少女ゝ詞をそ涙日沈
の大乎成就ありさぞる悦むゆんゝ戸酸いゆゝう一ふゝとゆふ荒妙打順ゝ
兼く此本弧たゆるふ彼而ある谷川ゑ流ゑゝ神通川の支流ゑゝパ一時ふゆゝれて

海に入誰か窮ぞともえせざるべしとてくく刀自と少女に艦を舁せ母屋と
出て谷川に突落すに端の浪にせかれ屍を流もやらで下流にしてん（ゐ
ある少女を佇の砂もなく膝退ける背後より荒妙岸波と撞落せしに溺て
沈て最期し浮出せり迷彼に薪を持る下にあつめ荒妙笑爾と打咲ひ
刀自よ少女便なき事と小ざかしく喧しき事べ大事を洩しやせんと後の障を
のぞかぬといふ事いかゞ其尾に與せし刀自もかゝる残忍の行跡そらおそろしく
なりて、此ゐかなる乎荒妙倫眼に見やりつ此老婆も頑にして臆せり往て母ハ
おくべきと心にきて手綱浄んに水とりてよと庭の井のかたにのぞめバ刀自ハ釜を
さる所を脚をとらへて其儘ふせて井の中へぞ陥入ける荒妙頌讃
菩提と打笑ふ浩りし処に真平今戻りしと門の戸を敲に荒妙此ハ慌忙と外
面に出しが母よ稍帰し産婦異なる難産なく其様子とやかくるに富山のちなも

薬あらバ服さし疾くとてふさまへ一傍の詞とハ知らで真平驚かし某催生薬
をもとめて急ぎ妙く来れるにもや後産の用の産の節にハ男八用なに
足らねバよし韋駄天の走ちなるがかと馳来ぞしとらへさも再富山をさして
駿走て走行ぬ荒妙後へ見やり舌甜して旨々と這奴を又も欺やらぬ去さよと微笑て
内に入て嘧ける嬰子の面をとうかやらり此奴も母の傍に肖し男児なるバ果報やあらん
とりさる喉を縊て啼をとゞめ不とりの稟流にもしつらそ小脇に抱さらバ館に帰
ろ此嬰子を種として薄情の怨のほどん夫左京を責ぞしあらん心地よやと哈々
呵々と打笑ひ天晴て立さりしハ赤いかなる巧のあるそうしさ心根あるあそ出し
さハ鬼神よりも己が心に造る罪業ぞかし

九

荒妙辱夫殺嬰児（あらたへおつとをはづかしめてみどりごをころす）
王谷揮刀退治鬼女（わうたにかたなをふるつてきぢよをたいぢす）

正妻荒妬ぐ
嫉妬姫妾
木葉が
赤子風
癸物として
夫左京と
厚い
千里齋畫

甚二
荒妙五入の
侍女を曳割
て活
あぐらき鬼女と
戦る

此時國府の館ハ何とも平産あとうゝと左京ふるく立山權現と頼つゝ八
いろゝと待とと殺ふ所飯ぞうときくめきて荒炒嵐いさゝ〜げふ入来まゐれば
左京ハあゝ待ゝ待〜ぞいゝふやくと問ふ荒炒まづゝ公母をゝ且そ木葉枝
弱質ふハまさりゝ案の外ふいとゆとくと所産あり殊ふ男の若ゝふく
坐るぞゝ〜さてもくあ且ふどゝも又上ふ肖へるものゝ目さ〜の清ある
ゝ〜り面けどゝく秀ふ〜ゝとゝめどゝくも場さゝとめどゝくも生つき
めゝふと語るふぞゝ且孤閨ゝ左京が喜び満面ふ溢る荒炒尚ふめどゝ
き限りふたゝゝく侍女ゝるふ吹聴〜さて若君誕生のゝぶきふ酒一献閑食
ぶゝと勧ゝふ左京何ゝと勇〜さゝぶ君の平常好ませふ所殺とゝふ
けゝく自煎焼〜て進ふんゝくそれも厨下ふ紀〜が聽ゝく魚炮る火笠ふ炭
火烈ゝとして鷹上の正中ふ盛ゝ荒炒俎の上ゝの水子孤のせゝくゝと

持出〜ゝぶ左京ゝ孤一目祝ゝく肝ゝ消〜ゝふ何事ゝゝゝゝふゝく詞も出ゆ〜ぞ
〜て目瞪ゝるぞゝゝゝ荒妙水子のゝゝくゝゝゝどく肌のゝゝふ竹の串ゝゝぶぞ
ゝと刺買ゝ俎のゝゝぶゝより血滴ゝゝゝぶれゝく油ゝゝゝぶふゝゝ〜く此水子ゝ
火笠の上ふ挿ゝく打返ゝゝ焼る事庖人の肉味ゝ調ぞるふ異ゝゝぶ左京ゝ目
前我子の有ゝふゝるふ志のびぬ眼の前ふ荒炒水子孤さつゝゝく微〜打ゝゝゝ且
ゝて君の好ゝふ〜侍殺ぞゝぶ孤食ゝゝく〜ゝく捌附ゝゝいぞ喰へゝ碓ゝ白眼さゝゝ
面ふ鬼女ゝゝゝく防阿羅刹のゝゝくゝゝあさゆ〜〜くも又冷ゝ〜く左京脚ふ
紀ゝゝゝゝ眩侍女ふ睨ゝゝふ荒炒ゝゝゝくゝゝ起あゝゝ悪ゆ〜ふゝゝふ子ゝ祇ゝ一口
ふ喫ゝゝ糊ゝ含〜ゝゝふ耳の根ゝゝ裂〜ゝ髪もゝゝれゝ迷ゝゝゝゝふゝく
ふ一の雲孤臂ゝゝゝゝゝ〜ゝゝ〜ゝ紀つ居つ岡〜ゝ面色燃ゝゝ知ゝく赫ゝゝゝ
て家の内一物も遺ゝゝゝゝゝゝゝ孤打〜て叫けめゝゝ日比愛ゝる殺ゝの衣裳孤

切出し剥々叩そこ扯断裂棄るひゝ朝厨子を捜て嗜の調度翫のたぐひ種々の什器皿ひくる迫推破搏壊るゝたゝかゝて拗こうその外を完て足ふ支る物投ちらし蹋ちしく掻上筥を捲乱し掃枝擽鬢髪矢字化粧の具推折さく鏡架の殘もつ執しぐにとぐともの面を撓面ふ傳ひく巻と把て牙を嚙し嘆る眼ふ血泪濺ぐゝぐ淵然とあとしつもぐらく悉くかくりくるゞ虹のとき息を吻て眼を利鬼あつ魄しや情なやさてをく我ゆゞう醜き面ゞ巫の中ふまくこゝとりとありやせんとくさく今きるゝ嫌こつるもうゞことを何とくかくゝ生しぞやよも此良ゆくゝゝゝたやせんあとのくちもしゝとゝまふ殘を撲地と抛て跳あゞつく攫つく左京褥をとりて抛裂れやものゞもと声と牽ふ侍女皆こゝなんせとろく被窩褥子を打うけくもりきあうくゆうく推辷しまゞを局へ入ゑくきゆぐ去ゆぐさめ宿とゞもいろうく閉ゞとそ

何条そひゆゝ尽きとるゝくし峯破と起く支る侍女の前る女ゞ喉咽ふくこゝ嘶つきくり一色呼ど喚まもゆく尻尾より引裂をてろ左右の小腕ふ組つきゝる二人の侍女ゞ左右の小ゞ脇下ど抱ゞとさろく推々ゝゝゝ骨摧け肉ちぎきく両の肘ぐつと拏擲てこそ斃々り後抱ふ組住しを前ふきゆゝくとりまふ頷と抗挫とえつく此女逃つくも畳四五歩ゆゝとゆもゝゝゝ首ゞゞゝ殘く質後ふく仆々り此形勢る怖ちの兄撫架のくげふかくきゆる侍女とものゝも脱しや女とゝふ両足と舎ゝくさゝくさゝるふ切左右ゝさろと引割々ゝゝゝ臀より搗まゝく乾仆割ゆゞゝゝる誠ふ廁上血ふ塗て血盆池獄のあゝくさゝるもかゝゆとゞゝゝ畏ゞく左京ゝゝ姪ゝ天魔破旬の獰入ゝり搦ゝゝより撃こうゝと命令ゝゝゝ家人ゝ拐ゝ抗ゝ鬼て手ふゆふ得物と引さげく彼方此方と追巡るふ荒妙翻る車蝶ゝゝゝゝゝゝとゝく電のゞくゝゝめき天井樓ゝと彼ゝく音ゝゝとゝゞゞ荒畑ゞ良ハ

又へどもうく何地へ跳出るも新しねど家人等尚も捧藤木どりく我もく
四方八方ふ追到しうど日暮遂ふその行衛を失く各手分ひ出ふ
来まろ浩りしうべ日々手分して四方の人里ハいふ遠ど山の奥谷の限ふく
せどもさゝふその影ともえぎりぬさまてば般若長者が娘荒妙法ふがゝ鬼と
ゆしいく國中ハナふおよそど北陸及びく言つゝ吉を搭く畏まり
ざるハなろうり邦説尊ふ禪林寺長老夢窓國師あハ建武の一乱出来く新
田足利の合戦更ふゆむ時ふく帝都も静ふざまバ姫く越前の國永平寺
の會下ふ塵ひ避く隠在るゞ此秋ち東国行脚の比ろさてゝまハ二人の小
沙弥と伴侶ふく吉祥山を立ち出び笈ひ負陽を発して三越の旅ふ赴ふひ
限りなきさ曠野ふまよひてらハゞくあるゝん問まほしく比ろとこ弱ふ向より
牧童七八人ばかりどちく来ち國師近倚くいざくのゝんこハ何と比地

そこ寓ふ三島野と賞ふさゝハ石苔ふ三嶋世の緒苧ふうハ葉秋風ふ色づき
ぬとゆ鶯啼らんと續し谷所ふるゝやと詠ふ牧童笛ふ合ふと紀新して
和傍ちうゞゆ此不ど鬼ゆりく夜ふふうるとバ山ゝふゝ平ゝ人を害し獣
をうるされバ晴時より下ふく家路ふ孩ふ門戸ひ閉て出ざるうり我ゝ例より
ハ遅くるとバ一足もまゆくゆうゆるどゆ人駄しもとその是野寺の急篷隆ゝと推
ゆれば牧童笛ふハ巻とそ出うんゆりくさもそうり逸足ふしそ奏ふうり此二人の小沙弥
ゝと関より帰余ごちくえゆるふ国師笑せふひ出家ゝ不惜身命と侍ふ伊
笛付とう恐んふ勇猛專精ふ進く来ふ音そゝも洛陽と出しより海天師景
出のふ隨ふゆくくゆる風流ふ足ゆ面くも見えぐうぶとして杖とゆるひ前ふ進く不種
の雫ふくくゆけつゆくくそのくくうえちゆふ秋草雨と栄く万虫の声長ふ
くゆる三日の月幽ふしく風浮雲と吹拂ハば誠ふ義景の限りゝ二人の小沙弥ハ

とのもごくおそろしく隔る事一里ばかりと覚えて行き交ふ人まれに絶えて人里もなし
月さへ野をおほふして中ゞなる宿もなくたゞ鬼一口の闇の夜にありけり
ゆくゆくハ遥かなる空より幽かなる光りて地にぞ流るゝが又消えて
の火陰をとみえて狐火もなく燃えて消えてハも出る事あるにうびしくて遠く
来て漸くとかききえてどうりよろり秋風ぞよく落ちて臭気鼻をうつ近るが
其ひとくさりうちにまちて一ト所の喪馬棄地なく荻藩生茂りたる叢陰に髑髏
朽ちたる屍墨を見て死人の手足かゞくて無し是ぞ敵左せりらんと哀れる声して呼く
ものありこれ聲を以ぞ骨髄に透るにあり形やあると見れば叢の中に若き
と思はる女あり前の髪を被ぞて眼ハ落くぼみて光をば咽ハ削るゞく腹
ふくれ手足ハそり爪ハ剣の尖なるにおびしきが死人の股を裂き膝節を掘出し髑
を嚙脳を吸ひ宍肉を噉ひ小沙弥ハおそれて衣の袖を引泪く因悌ハ近く待

你いかなるか是什麽人ぞと問ふに女血腥き息をつきて吻嘴に声を振ひ
吾儕ハ悋気嫉妬のふかきより終に鬼女と成り妄執の猛きそひより嗔恚
の炎を焼く身を焦し今世の人ながら立山の焦熱地獄に堕ち侍ひしありのもやと
呼泣玉師又問ふらく你ぞくの人のゆゑにして身ハ徒おりし果るぞ女答て吾儕
ハ国府の般若長者が娘荒妙とやものなり夫ハ京家の某甲を迎へるを花なる
らぐしに書き揃ハ常盤なく紫をりひとりに外に夫ハ逢ふる女をかくみ妬し
そひの炎曾を焼泪の雨ハ渕をなし恐のうぞくけもなくしるひくさ逐ひ来て鬼
女となり尚悪念の安らぐ女ハ母をも命を取りぬ夫も魘殺さずんや
べきとせる罪の娘らくして形を此土にまうし出ども本心ハ立山の地獄に住く
を受る事さゝに刹那の隙もなし剣の山の郭公ものが刀の身の錆となれバ迷ひの雲
の峯に立霞ひ亀魄ハ悪趣に沈しらど形を閻浮に生ある身なれバ飢て人の

肉を喫ん獣の骨をも咬つるまりまさぬき車をもくんせ参らせねとゝふにより
鵜の鐵丸を吐く身を焦くゝむ形勢ふ國師不便とみそなはし你よくゝきいた
の命を棄ん事何の理あらんる只ちぐゝく憍慢の根をさち恨嫉の葉をきるべし
と宣へば灵女此理ふ伏しゝく首を低しゝゝ久方ひふ瞋くゝお移ろや此一念の邊ぞして
我妄執の雲ふつう晴やゝんそくも捺菊ふ紀し身の未来永劫鬼ともあり此と
もあり六道四生ふ怨をうさぐ女もくゝ見さ看よくとゝふゝ学ん形ハ消くゝれし
あゝねう一團の幻火とあり陰々と燃あがりてぞ悉々國師歎じて曰まをや正
法念経ふ女人性心嫉妬ふ此因緑以女人死後多生餓鬼趣中と説ふ
見あり灵女いまゞ機徒熱せゞ化益を播をゞきふあゝを只あゝ多しき業
因といつべしゝく其夜ゝ三島野ふ草の枕をむすび明ふ當国の住人名
越右衛門時兼が館ふ入ふひく鬼女立山ふ篭ふるよゝを告くゝれより越ろ

後州へぞ赴ふさる狩ふ時兼ハ人民を劫し農務を妨る鬼女ふ矢ハ撃ふ
と弩弓を引ふる士民を捽く勢籠を立郡吏が手勢百余人を差向ねそもく
此立山とハ山足越中越後飛騨三州ふ跨る北國一の大高山あり嶺常ふ燃く猛
火を吐岩石峙て険岨言ふ絶ふる切ふ見バ登る事輙ゝ行ゝ郡吏駈引
とゝく洩さゞ討留でゝゝく山を包ゝト責ふ環太皷を打立鐘を鳴しゝ岩根を打
き木草を撃て吹入るゞ鬼女ハ見くゝを若中ゝ列ゝ以隅もるゝ一山を捜ゝ
も敢て眼ふ遮る者もゝゝ今ハ有ゝ変化魔緑の類ふ見バ何地へか遁しゝやと
夏勢手分ひるゝゝて探ふ所ふ俄ふ剱が峯ふ黒雲もゝゝ立覆へる得こそ
あれ見ふの鬼女現出るふの姿ふ二の眼ハ朱を解く鏡の面ふ洒々ゝとく口ハ月輪ふ
割ゝく上下の牙歯ふん遠ひ貫ふ百入塗ふ漆ふ如ゝく額を隠しゝ振分髪の
中ふ精の角鱗をもひく生出るが絶頂ふさゝくと現ふく大ふ念ゝ禁

河原に火焔を吐きしりの大勢白来る道は狭し谷は深し尾込しく
ことひろへれ郡吏遥に是を見て胴勢を呂射ちくめとてたるくと遠
矢を射るしうび鬼女は洞穴の中に駆入ぬと見て犯く一摩に攻近付分内
殺き穴の傍と十重二十重に圍くるに鬼女は更に音もせざり
ふりくふ玉谷真平は鬼女は主君の仇撃とうんのみと匿道を廻て跋穴
の口に待設てぞ待るぞ鬼女を蹴穴より裏へ廻うんとのうくと遣出しと見ると
寄て組しあり鬼女は跳あがりて念を呂吼れふく出見が不と揉合挑く争
ひるぐ谿の端に組く懸岸を踏損じ組合ながら上を下へ伏辷つ推ぬりて殺千
丈なるの崖下に浪そとぞ落うる所を見て誠中誠後の堰ふく市場者味
の者ども兼て鬼防のさわとて要害と構へ左縄と細に結く濱面に張廻し
いるぐ真平遂に鬼女の上にうるく組伏るとば驚彼鬼ようとしに不とそ見て科の細

と打撃て後は独の見へぬぞうりに色搦て推倒ふその重き事大磐石に推ぐと見
荒姉が一念の凝塊なる力うぶん九百人だりと曳く曳声を出しく漸推倒し本陳う
曳しくば郡吏大に真平が勇力を賞しぬきく速に刺殺とく大勢戈をのく連
戦に殺ふその一突の毎々に吐声撞の響きとへく真の鬼もよりも見に人過じとうく
こうるさるとば此所を鬼伏の邑とや慣し此に鬼谷山と呼ぶも今その址は道るうり
後年夢窓國師荒姉が怨霊解脱のうめ此鬼伏邑に一宇の堂を建く鬼谷山鬼
伏寺とぞ号らる（此寺永禄年間の兵火に罹て全く亡し今鬼伏村にある鬼谷山西性寺は非ず）さくも又鬼女の尸は人の見懲に
せよとく野に曝して棄置ふ里犬裏尸拷腑とも蝕喫るぞその犬ども残
らず腹の中より火燃出く焼焦て炭とうく失ふり是は荒姉が瞋恚乃炎
とや謂つべくかる妄念のうるさき者いうる業とうるさんぎとば人々尸の結ぐと
火葬めぞおしるるに火もよに中く廻る耿雷のごくるる音鳴るとるき火の中より

歌ち云者をドウ云クハイニヤル者ダト
聞タレバ初メホンノ中ヘフツクリトシマ
イ壁ニスル者セト云ニ附テミクイトケ
糸柳布や袋ヤ絃をフツクリトアラ
レマジリノカナヅチガフクト詠ジケレバ
ソレデハ歌乃道付ヌト云ニ付又讀ミニケリ
コノべりかわやせちよるこうしや
和乃りまレテツカナキヤ
ワウラカ

美色なる蝶銭千万ともなく舞出て四方に飛散ぬ人々奇異のおもひを
なし炭撥分て視るに一片の白骨も亡しさては尸骸蝶と化しけりとて里人
いよ〳〵怯をなし火葬せし土をとりて芦峅立山の地蔵堂なる施餓鬼供養とか
せりされば今に到迄毎歳七月十五日の夜立山の地獄谷に胡蝶数多出て舞遊ぶ
土人は是を精霊市とよべり是は亡者等が盂蘭盆會の回向を受てきたづく地獄
の受苦を宥され解脱歓喜踊躍して遊べるならんとぞすらめといへる或荒妬の怨
念ありと云さても此悪霊夫に報でかへあふんある惨しの女の一念やと人
皆身ぶるひして恐れあへりける。

千代曩媛物語巻之三畢